

「気になる」子ども研究の展開
－1982 年から 2016 年まで－

Development of the study on the “concern” children:
From 1982 to 2016

若山 飛鳥

WAKAYAMA Asuka

武庫川女子大学大学院 教育学研究論集

第 12 号 2017 年

【院生研究ノート】

「気になる」子ども研究の展開

—1982年から2016年まで—

Development of the study on the “concern” children:

From 1982 to 2016

若山飛鳥*

WAKAYAMA, Asuka

要旨

これまで、「気になる」子どもをめぐる様々な研究が行われてきた。研究当初、保育者の視点や保育観、子どもとのかかわりを問う広くトータルな「関係論」的枠組みにおいて論じられてきたが、法律の制定を契機に、研究の視角を、障害という属性要因一つに還元してしまう傾向が見られた。しかし、現場の日々の保育実践から、すべてを障害に還元してしまうのではなく、保育者と子どもを組み込む状況の全体から「関係論」的に捉えることが重要であると、改めて認識されてきた。これにより、「気になる」子ども研究は再びトータルな枠組みにおいて捉える研究が増えつつある。本研究ノートでは、「気になる」子どもをめぐる研究動向を年代別に整理し、これまでどのような研究が行われてきたかについて考察する。

はじめに

これまで、「気になる」子どもについて、どのような研究が行われてきたのだろうか。そもそも「気になる」子どもについては、明確な定義が共有されているわけではない。その定義は、保育者一人一人によって異なっている。つまり保育者によって「気になり方」に差異が存在する。このことは、これまでの研究において、くり返し指摘されてきている。

しかし、2005年に発達障害者支援法が施行されたことをきっかけにして、発達障害の早期発見が求められてきた。さらに、多様な障害の種別が示されたことにより、1歳6ヶ月健診、あるいは3歳児健診、5歳児健診において何らかの障害が診断された場合、子どもは早い段階からの支援対象とされ、一人ひとりへの個別的な対応が求められることになった。

このような背景から、「気になる」子どもは、それまで保育者との相互のかかわりという全体的な文脈において論じられてきたものが、子どもの属性要因に焦点を当てて論じられることが多くなった。このように、文献を調べていくうち2000年前後が「気になる」子ども研究の大きな転換期となっていることが明らかになった。現在、修士論文として「気になる」子どもとのかかわりを通して保育者がどのように変容していったのかを、インタビューを行い、明らかにしようと試みている。

本研究ノートにおいては、先行研究としての「気にな

る」子どもをめぐる研究動向について考えたい。現在手に入るものの限りで、「気になる」子どもをめぐる研究文献をまとめ、年代ごとに分析することで、研究の変遷を明らかにすることができると考える。表にまとめると、「気になる」子どもの研究動向についてⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期の3つに分けることができる。本文では、各時期に書かれた研究文献について、相対的に優勢となり、メインストリームとなる視点に着目してまとめて見ていくこととする。また、表については、次ページを参照されたい。

1. 「気になる」子ども研究：Ⅰ期

「気になる」子どもに関する初期の研究では、「障害」という用語はあまり用いられておらず、子どもの問題行動や保育者自身の子どもの見方から、子どもの「気になる」要因を探り、解決しようとする、「関係論」の立場から見た研究が多くみられる。

「気になる」子どもをタイトルとした文献で、最も古いものは1982年平井信義による『気になる子どもたち』である。ここでは、保育者にとって保育がしづらい子、あるいは問題児として捉えられている子どもに対し、保育者として、どのように対応すべきかについて、子ども側の要因が検討されている。つまり、精神薄弱・脳障害・自閉症・情緒障害という障害、あるいは家庭環境や生活習慣的な問題などと関連づけて論じられているのである。

* 武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻院生 (Graduate student, Mukogawa Women's University Graduate school of education)

	年	著者名	論文・文献タイトル	関連する法規定など
I 期	1982	平井信義	気になる子どもたち	
	1986	西野泰広 田島啓子 田島信元 手島茂樹 田嶋善郎	ちょっと気になる子どもたち	
	1991	小池みさを	保育者の感性「気になる子ども」について	
	1994	梅田優子 大場幸夫	保育者が気になる子どもを捉える視点としての関係性について(3)	
	1997	名須川知子	保育者の「気づき」による変容—気になる子どもの行動解釈をめぐ る保育者の見方の変化とその影響—	
		寺見陽子	保育者のかかわりと子どもの育ちに関する事例的研究(1) : 気になる子どもに対する保育者の心持ちと子どもを受容する過程	
	1998	刑部育子	「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的 分析	
II 期	2005	『児童心理』編集 委員会	LD・ADHD・自閉症・アスペルガー症候群—「気がかりな子」の理 解と援助—	2005 「発達障害者支援法」 (文部科学省 施行) 「発達障害のある児童生徒 等への支援について」 (文部科学省 通知) 2008 「幼稚園教育要領」 (文部科学省 改訂) 「保育所保育指針」 (厚生労働省 改訂)
	2006	結城孝治	「気になる子ども」の発達支援に向けて—障害児保育巡廻指導に おける保育的観点からのアドバイス—	
	2010	嶋野重行	「気になる」子どもに関する研究(3)—幼稚園における ADHD が 疑われる子どもに対する支援と事例—	
		本郷一夫 飯島典子 平川久美子	「気になる」幼児の発達の遅れと偏りに関する研究	
	2012	本莊明子	「気になる」子どもをめぐる研究動向	
III 期	2013	加藤由美 安藤美華代	新任保育者の抱える困難—語りの質的検討—	
	2016	守巧 酒井幸子 前田康弘 小笠原明子	幼稚園における気になる子に対する新任教諭による援助の実態	
		守巧	気になる子どもとともに育つクラス運営・保育のポイント	

こうした「養育の難しい子ども」を相手に、保育者がそれをよくする努力を重ねていくと、「普通の子ども」に対する見方や考え方、いわゆる「児童観」の幅が次第に広くなっていく。そうして行われる保育者の創意工夫が、問題を解決に導く時もあるという。

本荘（2012）によると、「最も古い著作では1986年西野編『ちょっと気になる子どもたち』がある」。この点については、これよりも古い文献があるのだが、本荘は最も古いものとして、次のように論じている。この『ちょっと気になる子どもたち』において、「気になる行動」とは、「おとなの価値観からみた行動の逸脱」であり、見方によっては問題でないものも多い。そして現実には子どもがトラブルをおこし、子ども自身も困っているものであっても、それはその子の発展途上での「つまづき」とみなすべきものであると指摘した。

「気になる」子どもに対して、「気になる行動の原因の違いを理解しそれぞれに応じた対処をするべきだ」としている。またその対処法については、「子どもの個性や状況に応じてあの手この手があること、大人自身が子どもとのやりとりを通して自己実現を果たすことが最も効果的な対処法になること、相互向上時の働きかけのポイントは子どもの行動の評価と修正にある」と述べている。

これ以後の「気になる」子どもについての研究を、小池、梅田、名須川、刑部、寺見の5つの論文から見ていく。

まず小池（1991）は、「〈気になる子〉の概念からイメージされる子ども像は、保育者によって異なり、その認識の相違は、保育行動に反映する」と述べている。また、「気になる」子どもへのかかわり方において、子どもの「気になる」部分ばかりにしてしまうと、子どもの内面的なものが見えなくなってしまう。それにより、自らの保育に対する見直しが困難になるという。こういったことから今後の課題として、「保育者が子どもを全体像でとらえ、様々な側面を持つ存在として、受容すること」が大切だと指摘している。

次に、梅田（1994）は、保育者が自分の価値観からズレた「行動」をとる子どもを「気になる子」とみなす、と述べている。また、保育者は、子どもがなぜそういったことをしてしまうのか、という子どもの「気持ち」にはあまり着目せず、子どもの表面的な行動のみに目が行ってしまいがちだが、その場合には、両者の間には溝が出来てしまう、とも指摘する。保育者が自身の価値観を見直し、子どもの内面的なものを探ろうと試みる場合には、両者の関係が好転することもあるという。しかし一方で、特定の子どものとのかかわりばかりに着目してしまうと、他の子どもが「気になる」行動をとってしまうこともあるという。そのため、保育者は絶えず自分の価値観や考えを見直していくことが必要であると指摘する。

名須川（1997）は、保育者間での話し合いにおいて、「気になる」子どもをテーマとして取り上げ、話し合いや、保育カンファレンスを重ねることを通して、保育者の子どもへの見方がどのように変化するかについて明らかにした。子どもとのかかわりを通しての気づきを保育者間で話し合うことによって、自己の保育観や保育実践の見直しが行われ、時間がかかりながらも確実に保育者と子どもが共に成長していく様子を捉えることができたと述べている。

刑部（1998）は、保育園に観察者として入り、そこにおける「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程を関係論的に分析した。約8ヶ月にわたって、週に一度のビデオ観察から、「ちょっと気になる子ども」が保育者や他児とのかかわりを通して、「気にならなく」なっていく変容過程をとらえることが出来た。その過程で起きていたことは、その「子ども個人の知的能力やスキルの獲得」といった変化ではなく、「共同体全体の変容」であった。

最後に、寺見（1998）は、保育者と子どもとのかかわりを通して行われる保育の中で、絶えず保育者自身の保育の見直しが行われること。また、子どもを語る時には、子どもと保育者が相互のかかわりの中で変容していていることを念頭に、子どもをとらえているという「自他の関係を見る視点」が重要であると指摘した。つまり、保育者にとっては「自己の認識観、発達観や保育観などがどのようなものであるか」を自覚すること。さらには、その自分の枠組みを通して、子どもの育ちをどのように捉えているのかを知る必要があるのである。

以上、1990年代の「気になる子ども」に関する研究では、子どもの「気になる」ことには、子どもを捉える「保育者の視点」が強く作用していることが示唆されている。関連研究には、保育者の「子どもの見方」を問うようなものや、保育者自身の保育観、子どもと保育者の相互のかかわりを問うもの、などが多く見られた。

子どもは、様々な側面をもつ存在であり、保育者との相互のかかわりを通して成長し、変容していく。つまり、保育者は子どもの「気になる」要因のみに、目を向けていくわけではない。保育者は、子どもを、保育者自身を含む状況の全体から捉え、それによって子どもの現在に働きかけている。こうした保育者と子どもの相互行為を通して、保育者は絶えず自分の保育観を変容させ、子どもをも変容させていくのである。このように、状況全体を変容させることによって、子ども自身の改善が図られていくのである。

2. 「気になる」子ども研究：Ⅱ期

しかし、2005年に発達障害者支援法が施行され、多様な障害の種別が示され、発達障害の早期発見が大切であるとされた。さらに2008年には幼稚園教育要領と保育所

保育指針が改訂され、障害のある子どもに対して個別の指導計画を作成するなどして、丁寧な支援が求められた。そのような背景もあり、2000年代に入ってから、「気になる」子どもを発達障害の視点から捉える、「属性還元論」の立場からの見方が多くなされるようになってきた。そのような子どもへの支援方法や早期発見について述べる研究、障害に関するチェックリストやマニュアル化した対応策、そして「療育に、より早く結びつけることが望ましい」と述べる研究などが増えている。その他に、「気になる」子どもの行動特徴を探る研究も増えている。このように、「気になる」子どもは、ほぼ「発達障害」の疑いのある子どもと同等に用いられるようになってきている。

「児童心理」編集委員会（2005）は、「気になる」子どもを「気がかりな」子どもとし、「気がかりな」子どもの乳幼児期は発達のペースが多様なので、LD・ADHD・広汎性発達障害などの障害があるのか、あるいは個人差の範囲に収まる程度の問題なのかを特定することは難しい、と述べている。

「気がかりな」子どもは、特別な支援を受けずに自然に問題が改善されることもある。しかし、特別な支援をうけなかったがために問題が複雑化し、二次障害を発生させてしまうことも少なくない。このことから、後にLD・ADHD・広汎性発達障害と診断された子どもたちの乳幼児期における特徴などを記している。

結城（2006）は、2005年に施行された発達障害者支援法により、多様な障害の種別が示されたことから、後に障害であると診断されるケースが増えたと指摘した。初期の段階で正確な診断が下されるなら、保育をする上での保育者の不安が減るはずであると述べている。

嶋野（2010）は、幼稚園における「気になる」子どもの病理的症状と、それに対する支援の効果について検討している。不注意、多動性、衝動性といった、ADHDに固有の行動特性が、保育者にとって「気になる」ことが明らかとなった。また、今後それらの行動に対し効果的な支援内容のあり方を検討すべきだとした。

本郷（2010）は、「気になる」子どもに対して、適切な支援を進めていくためには、子どもの問題行動の背景となる発達状態を捉える必要があると指摘し、乳幼児発達スケール8（KIDS）および本郷によって作成された、「気になる」子どもの行動チェックリストを用いて調査を行った。結果として、「気になる」子どもの支援にあたっては、発達の偏りと遅れを発達関連の観点から丁寧にとらえ、それに応じた支援の方法を探ることが重要であると指摘した。

本荘（2012）は、「気になる」子どもの支援にあたっては、背景要因として考えられている「〈子どもの問題〉としての発達障害の理解」や「家族や保育者など子どもと関わる人たちの相互作用の影響」を考慮して、一人一

人にあった個別的な支援を検討する必要があると指摘している。また、様々な行動特徴に対して具体的な支援方法の事例研究を重ね、深めていくことが必要だと述べている。

このように「気になる」子ども研究のⅡ期においては、それまで保育者の視点や、子どもとの相互のかかわりなどといった、全体的な文脈において語られてきたものが、発達障害といった、子どもの「属性要因」のみに焦点を当てて語られることが多くなった。また、多様な障害の種別が示されたことにより、障害ごとに分けられたマニュアルが多く出されている。

保育者は、こういったマニュアルを参考にしたり、医療的な側面から巡回相談員との意見交換をしながら、一人ひとりの障害にふさわしい保育のあり方を日々模索していたのである。

3. 「気になる」子ども研究：Ⅲ期

2013年以降になると、子ども側の発達障害という「属性要因」との関連は依然として示唆されるものの、再び保育者側にも着目する研究も現れてきた。

加藤ら（2013）では、「気になる」子どもというタームは出ていないが、重要な論点が提示されているので、ここで挙げておく。

加藤らは、新任保育者に共通している特有の困難さを明らかにするため、新任保育者に対して仕事の困難さに関するインタビュー調査を行った。あわせて、保育経験者が回想した新任の頃の困難に関するインタビューを行い、それらを比較し検討した。インタビューの結果、新任保育者と保育経験者の約半数が、「学級経営の困難さ」を感じていた。これは、新任保育者が「クラス集団と関わる」と個への援助を同時に行わなければならないことに葛藤を感じるからである。また、若い保育者は、状況が変化する中においても、「社会的規範」や「園のルール」等を重視する、柔軟性の欠如した、固定化した方略を用いる傾向が見られることが示唆された。これらの対応策として、新任保育者が学級担任となる場合、サポート体制がとられるべきだと指摘した。

守ら（2016a）は、保育経験年数の差によって、「気になる子」への対応が変わると指摘し、保育経験年数3年未満の保育者に、気になった子どもの対応についてのアンケート調査を行った。調査の結果、子どもの「気になる」行動として、「保育者が理解しがたい言動」があげられた。常に臨機応変の対応が迫られる保育現場において、自身の力量不足からくる不安や戸惑いから、彼らは「子どもの理解できない行動」に直面するとその子を「気になる子」として焦点化すると指摘した。

また、守（2016b）は、「気になる子」とは保育者にとっての、どのようにかかわってよいのか「わからない子ど

も」であるとした。また、その子自身を理解できているか、できていないかによっても、気になったり気にならなかったりする。このことからしても、「気になる子＝発達障害」という認識は正しくはない。支援が必要な子どもという発達障害をすぐにイメージしてしまうが、「障害の有無が気になる子をめぐる議論の中心」ではない。

「保育者が子どもをどのように見立て援助していくのか」、を議論の中心に置くことが大切である。そして、日々のかかわりの中で、「個」が成長するにつれて「集団」が成長し、「集団」が成長するにつれ「個」が成長していく。このことから、保育を運営していく上で、「個」と「集団」どちらかに力を入れて行うのではなく、同時に援助を進めなければならない、と指摘した。

このように、「気になる」子どもをめぐる研究の多くは、今日においてもなお、障害と関連付けて進められている。しかし、実際の保育の現場における日々の子どもののかかわりは、言葉や文章では語りつくせない、ダイナミックなものである。たとえ最初は、障害という要因に還元してしまうことがあったにしても、保育者は、子どもとの日常的なかかわりを通して、障害という枠組みを超えたトータルな見方に移っていかざるをえないのである。このⅢ期の出現は、保育者が保育現場で実際に子どもと関わることを通して、障害という要因一つに還元してしまうⅡ期のあり方を反省し、再びⅠ期のような、子どもとのトータルなかかわりを取り戻そうとする時期であると考えられる。

考察と今後の展望

以上、本研究ノートでは、「気になる」子ども研究の動向を現在手に入るものの限りで整理した。それにより、「気になる」子ども研究は、時代によって優勢となる視点に変化があることが明らかとなった。

Ⅰ期において、「気になる」子どもとは、保育者によって異なり、保育者の保育観が基準となって浮かび上がるものである。そのため、保育者の内面的な枠組みについて問う「関係論」の立場からの研究が多く、また、子ども一人ひとりに応じた様々なアプローチや援助が行われるべきだとされた。内面的な枠組みの見直しは、保育者による日常の保育の中で行われることもあれば、他の保育者との話し合いの中から行われることもあった。また、「気になる」子どもが「気にならなく」なっていくためには、保育者からの援助のみならず、園という「共同体全体の変容」が必要であることが明らかとなった。

これに対してⅡ期においては、2005年に施行された発達障害者支援法により、障害の種別がさらに細くなり、これまでどの障害にもあてられなかった「気になる」子どもの多くにも、発達障害というカテゴリーに当てられることになった。「気になる」子どもを、早い段階で障害

にあてはめ援助をしていくことは、その子どもの今後をよりよいものにする。このような考え方により、「気になる」子ども研究は、障害と密接に関係づけられたもの为中心となり、論じられるようになった。

このように、Ⅱ期においては、「属性還元論」の立場の視点が優勢であった。一方で、Ⅱ期においても、Ⅰ期の「関係論」の立場の視点を一貫してもち続け、論じられたものもある。

しかし、Ⅲ期においては、依然として「気になる子＝発達障害」という見方は強いものの、それだけではないということが、現場の実践経験によって明らかになってきている。障害だけに還元してしまうべきではない。障害への還元は、一つの選択肢に過ぎないのである。日々の生活や保育者とのかかわりを通して、その子どもがどのように成長していくかは、現段階では分からない。保育者は、最初は障害という要因に還元してしまったとしても、日々の子どものたちとのかかわりを通して、障害という枠組みを超えた見方に移っていかざるをえないのである。このように、現場の保育者は、安易に「属性還元論」的な立場をとらず、子どもの現実に関心をもちつつ、その日のその子が、健康で安全に楽しく園生活を送れるように様々な援助を行う。この実践者たちの日常的行動が、「気になる」子ども研究のⅢ期を開いてきたものと考えられる。

以上から、「気になる」子ども研究Ⅲ期においては、再びⅠ期のような、子どもと保育者を取り巻く全体から「気になる」子どもを、見ていく「関係発達論」の立場からの見方も出てきている。

Ⅲ期におけるこのような考え方の変化は、Ⅱ期の「属性還元論」の立場をとってきた研究者が、障害だけに還元してしまうことの限界を感じ、「関係論」の立場に移行していったものと考えられる。また、Ⅰ期において中心となった「トータルに見る」という視点が、Ⅲ期において蘇ってきたということは、この視点が強く生き延びてきており研究をも突き動かしてきた、ということでもある。一方で、Ⅰ期において「関係論」の立場をとっていた研究者は、一貫してⅡ期においても、Ⅲ期においても保育者と子どもの「関係論」の立場をとってきたものと思われる。これについては、修士論文において実証的に考え、実践の持つ強みを、実践者たちを対象とするインタビューによって確かめるつもりである。

—参考文献—

- 梅田優子・大場幸夫(1994)「保育者が気になる子どもを捉える視点としての関係性について(3)」『日本保育学会大会研究論文集』(47), pp. 86-87.
- 加藤由美・安藤美華代(2013)「新任保育者の抱える困難—語りの質的検討—」『兵庫教育大学教育実践学論集』(14), pp. 27-38.

刑部育子 (1998) 「「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析」『発達心理学研究』 9 (1), pp. 1-11,

小池みさを (1991) 「保育者の感性「気になる子ども」について」『日本保育学会大会研究論文』(44), pp. 122-123.

「児童心理」編集委員会 (2005) 『LD・ADHD・自閉症・アスペルガー症候群—「気がかりな子」の理解と援助—』, 株式会社金子書房,

嶋野重行 (2010) 「「気になる」子どもに関する研究 (3) —幼稚園における ADHD が疑われる子どもに対する支援と事例—」『盛岡大学短期大学部紀要』(20), pp. 20-34-

寺見陽子 (1997) 「保育者のかかわりと子どもの育ちに関する事例的研究 (1) : 気になる子どもに対する保育者の心持ちと子どもを受容する過程」『神戸親和女子大学児童教育学研究』(16), pp. 114-133.

名須川知子 (1997) 「保育者の「気づき」による変容—気になる子どもの行動解釈をめぐる保育者の見方の変化とその影響—」『学校教育学会 学校教育研究』(8), pp. 19-35.

西野泰広・田島啓子・田島信元・手島茂樹・田嶋善郎編 (1986) 『ちょっと気になる子どもたち—保育・教育現場の臨床心理—』福村出版株式会社,

平井信義著 (1982) 『気になる子どもたち—幼児の精神衛生と保育—』株式会社フレーベル観,

本郷一夫・飯島典子・平川久美子 (2010) 「「気になる」幼児の発達の遅れと偏りに関する研究」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』(58), pp. 121-133.

本荘明子 (2012) 「「気になる」子どもをめぐる研究動向」『愛知教育大学幼児教育研究』(16), pp. 67-75.

守巧, 酒井幸子, 前田康弘, 小笠原明子 (2016a) 「幼稚園における気になる子に対する新任教諭による援助の実態」『東京家政大学研究紀要』(56), pp. 115-121.

守巧著 (2016b) 『気になる子どもとともに育つクラス運営・保育のポイント』中央法規出版株式会社, pp. 2-9.

結城孝治 (2006) 「「気になる子ども」の発達支援に向けて—障害児保育巡廻指導における保育的観点からのアドバイス—」『國學院短期大学紀要』第 23 号, pp. 115-136.

文部科学省ホームページ「特別支援教育について：発達障害者支援法」(2005 年 4 月 1 日施行。) http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/05011301.htm (2016 年 10 月 14 日参照。)

文部科学省ホームページ「発達障害のある児童生徒等への支援について」(2005 年 4 月 1 日通知。) http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/06050815.htm (2016 年 10 月 14 日参照。)

文部科学省ホームページ「幼稚園教育要領」(2008 年 4 月改訂。) http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/ (2016 年 10 月 14 日参照。)

厚生労働省ホームページ「保育所保育指針」(2008 年 4 月改訂。) <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04b.pdf> (2016 年 10 月 14 日参照。)